「広がる」・「超える」・「届く」

多様な学びの手法から生まれる
新しい社会教育について

答申

令和４年 10 月 31 日

国分寺市社会教育委員の会議

目　　次

はじめに　2

１　国分寺市の社会教育が生み出してきたもの　4

（１）これまでの国分寺市の社会教育のあゆみ　4

～「つながり」「循環」をキーワードに～

（２）市民活動団体からみた「学びの循環」　7

２　コロナ禍がもたらした社会教育への影響　14

３　時代の変化に対応した多様な学びの手法と学びの循環　18

４　広がる・超える・届く～これからの社会教育に向けて　31

おわりに　33

参考資料

はじめに

コロナ禍は私たちの暮らしに何をもたらしているのでしょうか。

令和２年初頭、世界中を震撼させる脅威として立ち現れた新型コロナウイルスは、私たちの生活に大きな制約を強いました。それからまもなく３年を迎える今、「With コロナ」という言葉のとおり、私たちは撲滅困難な感染症と共に生きる暮らしの中で、制約と自由を巧みに折り重ねながらその間を往来したり、制約や自由自体の在り様を大きく転換させたりしながら、より良く生きる生活を模索し続けています。

その中で人々の学びや社会参加の在り様も大きく変化しました。どこにいても、ボタン一つで、あらゆる場所にいる人々と会話ができるオンラインミーティングツールも飛躍的に普及しました。当初、学校の一斉休校や公民館などの社会教育施設の閉鎖に途方に暮れた人々も、次第にこれを使いこなすようになりました。失われた人と人の集いの代替として使われ始めた ICT 技術は、今や、多くの人々が時と場合により適切な方法を使い分けながら、積極的に使用するものへと転換しつつあります。

国分寺市社会教育委員の会議が、「多様な学びの手法から生まれる新しい社会教育について」をテーマとする諮問を受けたのは、その転換の只中にあった令和３年４月のことです。この難題に向かうために、本会議では、まずコロナ禍の影響の前に、これまで社会教育が果たしてきた役割や機能に立ち返るところからはじめました。

国分寺市教育ビジョンが目指すのは、「人と人とがつながり、学びが循環するまち」です。これは平成 27 年に策定された第１期の教育ビジョンから継承された中長期的な目標であり、「子ども、高齢者等の世代の相違や、障害の有無等にかかわらずすべての市民が、学校や社会教育施設、地域等での学びを通じて、人と人とがつながり、互いに学び合い、学びが継承され、まちに学びがあふれるように」という願いが込められています。

社会教育は、ここに謳う「人と人とのつながり」や「学びの循環」を駆動する大きな役割を果たしてきたはずです。しかし、この「つながり」や「循環」という言葉は、抽象的で見えづらく、私たちは、国分寺市で展開されている社会教育が、実際にどのような「人と人とのつながり」を生み、そこでの学びはどのように「循環」しているのか、できる限りその具体的姿を深く知るところから始める必要があると考えました。そして今、「With コロナ」の中人々が創意工夫を凝らして学びに向かう中で、何が損なわれ、何が新しく生まれているのか、そして「つながり」や「循環」はどのように変化しているのかに迫ることを調査研究の柱に据えました。

国分寺市では、令和３年６月に公民館運営審議会がいち早く、「新型コロナウイルス禍における公民館のあるべき姿」を答申し、同年９月には、図書館運営協議会も「新しい生活様式に対応した図書館サービスのあり方について」を答申しています。公民館運営審議会の答申では、国分寺市が標榜してきた公民館のテーマとしての「つどう（集う）・つなぐ（繋

ぐ)・つくる（創る)」を軸に、コロナ禍で直面した困難について、200 以上の公民館利用団体へのアンケート調査から考察しています。そして、試行錯誤の中で実施したオンライン講座の事例から「『共に学ぶ場』としての公民館がオンライン化を進める際の理念と手法」として、次の６点を提言しました。

(1) どんな時でも、地域の拠り所として開かれた公民館であるために。

(2) 新しいニーズ、新しい社会への対応力を学ぶ場であるために。

(3) オンライン活用で、公民館へのアクセスの間口を広げるために。

(4) オンラインのもつ多元性と双方向性を生かすために。

(5) 確かな発信力を持つ公民館であるために。

(6) 対面とオンラインの併用で “ハイブリッドな公民館”を目指して。

また、図書館運営協議会の答申においても、ポストコロナ時代を見据えたデジタル化への対応や、新しい生活様式に対応した図書館サービスの構築などを提言しています。

社会教育委員の会議では、これらの理念や手法の提言を受け止めつつ、社会教育施設を利用する団体はもとより、これを拠点としない市民団体も含め、個々の市民団体の視点をより重視し、そこから見た「つながり」や団体活動が生み出している「学びの循環」について把握することを試みました。さらに各団体がコロナ禍において、様々な場面で創意工夫を凝らしながら創り出している「学びの手法」をできるだけ立体的に捉えるとともに、そこから生じている「つながり」や「学びの循環」について考察を行いました。

そのことを通して、改めて市民が紡ぎだす社会教育活動の根底にある原理を確認し、多様な手法が生み出すこれからの社会教育への期待と、それを支える社会教育施策への提言をまとめています。

先述した通り、本答申は教育ビジョン全体の遂行の土台であり駆動力となる市民による社会教育実践の在り様を忠実に描いたものです。社会教育施策の所掌を超え、組織間・施策間の「つながり」と「循環」を重視した教育施策の実現にも役立てられることを、強く期待しています。

（議長　入江優子）

１　国分寺市の社会教育が生み出してきたもの
（１）これまでの国分寺市の社会教育のあゆみ
～「つながり」「循環」をキーワードに～

①「教育ビジョン」に見る国分寺市の社会教育

国分寺市教育委員会では、平成 27 年に「国分寺市教育ビジョン」を策定しました。これは、すべての市民が生涯を通して主体的に学べるまちづくりの実現を目指すための計画であり、子どもの頃から自ら学んでいく姿勢・意欲を育むことが大切であるとしています。そして、学んだことを市民一人ひとりが互いに連携して共有し、学びを地域に還元していくことで次の世代へ伝え、世代を超えて学びが循環することを目標に、基本的な考え方を「人と人とがつながり、学びが循環するまちの実現を目指して」と掲げています。令和２年には「第２次国分寺市教育ビジョン」が策定されましたが、「目指す学びのまちの姿」としてこの考え方が引き継がれることとなりました。

こうしたビジョンの下、社会教育分野では、「社会全体の教育力の向上」「歴史遺産を生かした学びの推進」という２つの施策の方向性を組み立て、多様な学びの提供、自主的な学びの支援、学習環境の整備、学校・家庭・地域との連携、学びをいかす機会の創出を中心とした取り組みを行っています。

②社会教育施設を拠点とする「つながり」や「学びの循環」の創造

○公民館活動のあゆみ

国分寺市では、誰もがいつでも学べるように、昭和 38 年市内最初の公民館の設置以降、中学校区ごとに５館の公民館を整備し、市民の学習・活動を支援してきました。

「つどう（集う）、つなぐ（繋ぐ）、つくる（創る）」の三つの「つ」を基本的な考え方とし、社会教育法に基づく各種事業や講座（講義型、ワークショップ型、体験型）を実施すると共に、学んだ方々の自主グループ化を推進するとともに発表・交流の場である公民館まつりなどを開催し、市民に学習・活動の場を提供しています。

公民館で共に学び、そこで得たものを発表し、興味を持った人々が集いの輪の中に参加することで新たな繋がりが生まれ、さらに共に創り発信していくという循環が育まれており、市民自身の学習や活動による「学びの循環」と、その成果の発表や交流をとおして地域での「学びの循環」を創出してきました。また、公共無線 LAN の設置やモバイルルーターの貸出など、学習環境の整備にも取り組み、公民館利用団体は平成 30 年度約 2,000 団体と、実に多くの学びや活動の場となっています。

こうした取組をさらに進めるため、公民館運営審議会においても、「地域づくりを目指した公民館のあり方 ―人と人がつながり、学びと地域づくりが循環する公民館活動―（第１

期答申)」、「国分寺のまちを学び共に創りだす公民館活動の今後について（第２期答申)」などについて調査・審議を行ってきています。

○図書館活動のあゆみ

図書館では、市民の知る権利と学びを保障するために、昭和 48 年の図書館の開館以降、市内５館と１分館２貸出窓口で、図書館法に基づく図書館サービスを提供してきました。市民の身近にあって、子どもたちに読書の楽しさや喜びを伝え、市民の居場所や安らぎの空間となるように図書館運営を進めてきています。また、図書館の蔵書の幅広い構築を目指し、国分寺市の地域資料や電子図書などのデジタル資料も収集・提供し、季節や時節にあった図書の展示などで本の情報提供に取り組んでいます。

特に、おはなし会、おはなしの出前、映画会などの児童向けサービスに加え、学校との連携による児童・生徒とのコラボレーション事業なども積極的に行っています。図書館利用が困難な方には、障害者サービスや託児サービスなどを提供し、ホームページからの蔵書検索や資料の予約サービスなどができるシステムの構築にも取り組んでいます。

こうした取組を通して、市民一人ひとりが、図書館資料から情報を収集し、自身で学び、その成果が地域や社会において積極的に活かされていくことで「学びの循環」が創出されるとともに、図書館の講座参加者が学校・地域での活動や図書館ボランティアとして参画することでさらにその循環の輪が広がってきていると考えられます。

○史跡・文化財等に関する活動のあゆみ

国分寺市の市名の由来になっている「武蔵国分寺跡」は大正 11(1922)年に国の史跡指定を受け、今年度 100 周年を迎えました。原始時代から現代までの、史跡や文化財の調査研究および保存事業と、国分寺市の歴史を踏まえた学びの場の提供や普及活動を進めています。武蔵国分寺資料館は「見る」「学ぶ」「訪ねる」をコンセプトに史跡武蔵国分寺跡やさまざまな国分寺市の文化財を紹介し、情報発信と、児童・生徒から大人の方に地域を知る機会を提供しています。また、歴史講演会や各種書籍の発行、資料の閲覧や取材協力などをとおし、国分寺市の歴史を広く周知することに取り組んでいます。

これらを通して、文化財への理解を深め郷土愛を育むとともに、文化財の保護と普及を市民自らが担っていけるよう「ふるさと文化財愛護ボランティア」の育成とその活動の場を提供し、市民の活動を支援しています。

③社会教育委員の会議の提言・調査研究にみる社会教育

これまで述べてきたような国分寺市の教育ビジョンや社会教育施設を拠点とする実践を踏まえつつ、社会教育委員の会議では、この数年、“子ども”を中心にした調査研究を行ってきました。それは、まちの未来を担う“子ども”と地域のつながりの状況を把握することで、社会教育の取組の成果や課題を明らかにし、「目指す学びのまちの姿」に向かう方途を

探るためです。平成 26 年度の諮問「子どもの活動拠点としての社会教育施設の在り方について」に対し、「人と人のつながりをとおした子どもの居場所づくり」を基本目標として答申（平成 28 年３月）をまとめました。特に、その中では、社会教育施設である公民館・図書館・文化財展示施設を対象として、下記の三つの提言を行っています。

提言１　使いやすい施設・居場所となる施設

①気軽に立ち寄れる時間・空間・事業をつくる

②地域で子どもを育てる意識を高める

提言２　人を育てる施設

①子どもの力を活かし、役立つ経験の場を意図的・計画的につくる

②子どもと大人の橋渡しをするスタッフの育成

③子どもと大人が共に活動し、共感できる事業づくり

提言３　時・場・人のつながりを生み出す施設

①施設間の連携

②つながりを創れるコーディネーターの配置

③包括的な情報提供

④情報提供の条件整備

また、平成 28・29 年度の「社会教育施設調査研究」では、子どもに着目した施設への転換において生じる課題の整理を行いました。さらに、平成 30・令和元年度には「教育ビジョンの実現に向けて（赤米を活用した社会教育事業への取組み）」について調査研究を行い、教育ビジョンの根底にある「郷土愛」をいかに育むかについて提言をまとめています。

④まとめ

このように、これまで国分寺市では、「つながり」や「学びの循環」を創出する各種施策の展開や市民活動の支援、各種委員会からの提言等を重ねてきました。その中では、学習者個人の中で循環する学びのみならず、学習者同士の交流から生まれる「学びの分かち合い」や学習成果の還元による「地域への学びの広がり」、世代を超えた「学びの伝承」や文化財などを介した「郷土愛」の醸成など、様々な「学びの循環」の創造が企図され、また創出されてきていると考えられます。

（２）市民活動団体からみた「学びの循環」

今般、新たな諮問を受けて社会教育委員の会議では、前節で述べてきたような行政を中心とする取組に対し、実際に市内で活動する団体はこの「つながり」や「学びの循環」についてどのように認識しながら活動を行っているのかを明らかにするため調査を行いました。

本節では、その調査結果のまとめを通して、市民活動団体が捉えている「学びの循環」の全体像をまず明らかにしていきます。

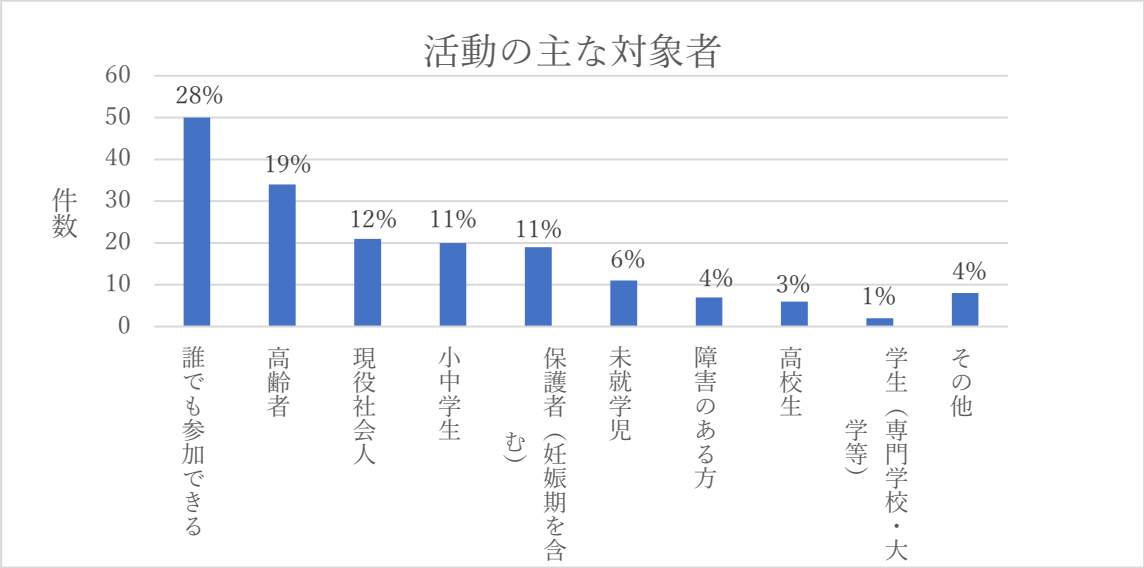
○「学びの循環」に関するアンケートの実施

調査は、市内で活動する団体を対象に次の方法で行いました。まず、公民館５館利用団体については公民館課の協力のもと、調査期間中に施設利用のあった団体に、手渡しやレターケースで配布を行い、その他社会教育委員とつながりのある団体には直接依頼を行いました。公民館利用団体以外の団体には、市の福祉関係の部署や学校の協力のもと調査への協力を依頼しました。

調査時期は令和３年 12 月 1 日～12 月 20 日であり、緊急事態宣言やまん延防止措置は解除されていましたが、感染状況は予断を許さず全面的な活動再開には至っていない時期となります。（約 300 団体に調査を実施し、100 件回収）

アンケートにおいては、大きく分けて「コロナ以前からの日頃の活動の概況」と「コロナ禍による活動の変化や活動の工夫」についてお聞きしましたが、本章では前者の調査結果をお示しします。（後者は３、設問全体は参考資料を参照。）

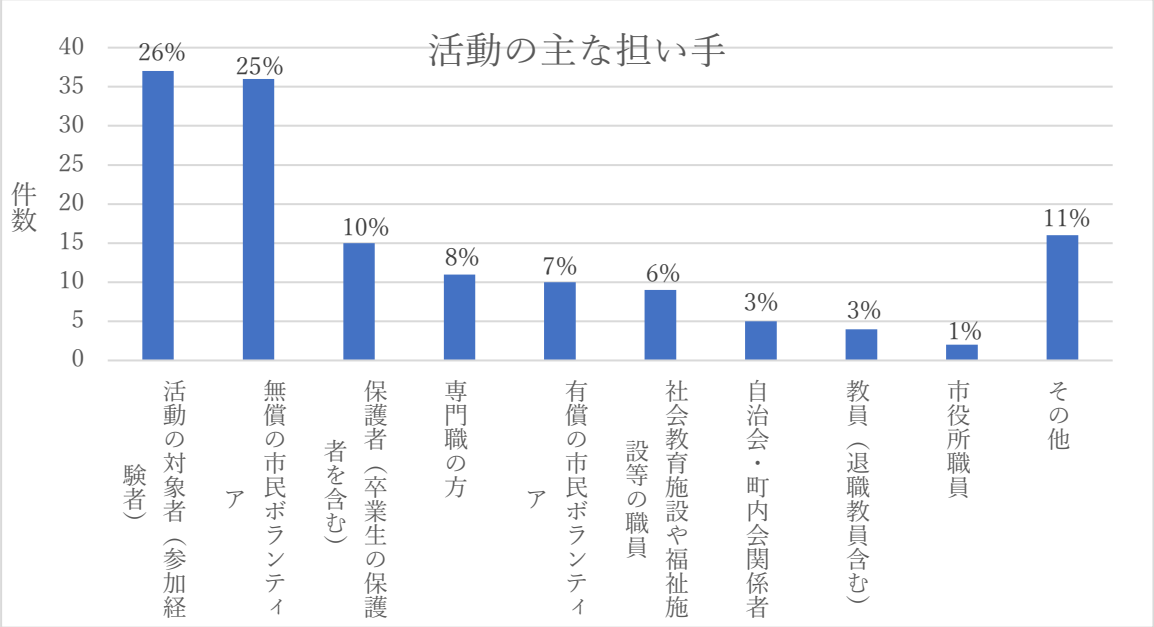
① 活動の主な対象者（活動や支援の対象となる方、講座や行事等の参加者）（※複数回答可）



活動の主な対象者としては、複数選択のなかで「誰でも参加できる」を選択した団体が多

く見られ、参加資格に特別な要件を設けていない団体が多いことがわかります。

② **活動の主な担い手（活動の企画や運営を行う方、指導や支援を行う方、ボランティア等）（※複数回答可）**

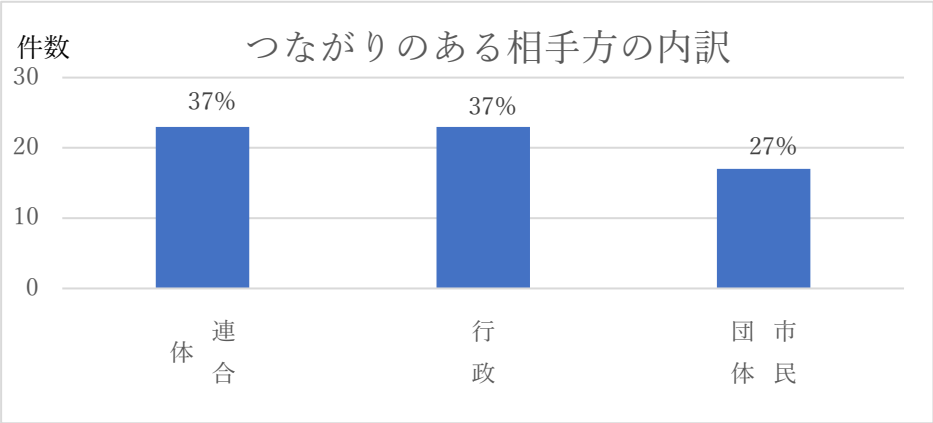


※無回答３件

活動の主な担い手は、活動の対象者（参加経験者）、無償の市民ボランティアと回答した団体が多く、市民自らの手で活動を支えている様子が窺えました。

「その他」の内訳は、市民農業大学 22 期生・誰でも・居住者・会員の方たち・家庭文庫なので主宰者と友人４人・ＮＰＯ団体・サッカーチーム・全員、会員で運営・指導資格所有者・先生・生け花講習・公民館を中心に活動するグループ・近隣大学、東京学芸大学の学生・公民館利用団体（複数回答）等、16 団体でした。

③ **市民団体や団体の連合体（連絡会や協議会など）、行政とのつながり**



※市民団体には「NPO 法人」を含む

※連合体とは複数の団体で構成される「〇〇連絡会」や「〇〇協議会」などを指す

（内訳）

【市民団体】

ひかり星の会、冒険遊び場の会、母と子のファミリーサロン、
新日本婦人の会、さくら草の会、あゆみ会、国際ソロプチミスト国分寺、
国分寺市青年会議所、雪どけ、オハナ、スポーツウェルネス吹矢協会、
菜の花会、美しい用水の会等

【連合体（連絡会、協議会など）】

国分寺市社会福祉協議会、子ども・子育て円卓会議
国分寺市文化団体連絡協議会、観世流同好月例会、市内文庫連絡会
ボランティア活動センターこくぶんじ、５地区連絡会、
市民文化祭実行委員会、地域福祉連携協議会、東京国際交流団体連絡会議、
東京外国人支援ネットワーク、東京都合唱連盟、三多摩合唱連盟、国立音楽連盟
国分寺おはなし文庫連絡会等

【行政】

社会教育課、子ども家庭支援センター、障害福祉課、公民館課、小金井警察署、
国分寺消防署、市立小・中学校、子ども子育て事業課（調査時点での名称）、
恋ヶ窪図書館（市内図書館）、緑と建築課、子ども若者計画課、都立国分寺高校等

④ つながりをもつことのメリット

【他の市民団体とのつながりを持つ団体】

・目的を持つことによって、練習にも楽しく励みになります。
・新しい指導法や身体的に丈夫になれるような身体の動かし方
・発表の場が増える

【連合体とのつながりを持つ団体】

・発表という目標をもって取り組める。ほかのグループとの交流が少しある。
・ボランティアの方々が把握できる。ボランティアの方々の保険が適用できる。
・地域の人たちにとって互いに顔が見える関係作りができる。

【行政とのつながりを持つ団体】

・講座の企画、運営の手助けや講師との繋がりを持たせてくれる。
・イベント開催の際に行政が共催になることで施設等の連携ができスムーズに進行できる。
・障がい者を見守り、支えるための理解者のつながりが期待できる。

【重層的な（多方面の）つながりを持つ団体】

＜他の市民団体や連合体とのつながり＞

・練習の成果を披露することで喜んでいただける

・社会との繋がり、友達が増える等でボケ防止になる。行政上、また市内の文化活動、市政の状況など知るチャンスがある。
・専門のかたから障がい者への対応、支援のアドバイスをいただける

＜連合体や行政とのつながり＞
・情報交換ができ、自分たちの活動をいかし、現状を知り、対策、改善することができる。
・準備会や実行委員会を行うことで、市民の要望に即した事業の実施を目指すことができる。
・情報交換をしたり、合同で行事や研修を行うことができる。協力し合うこともできる。

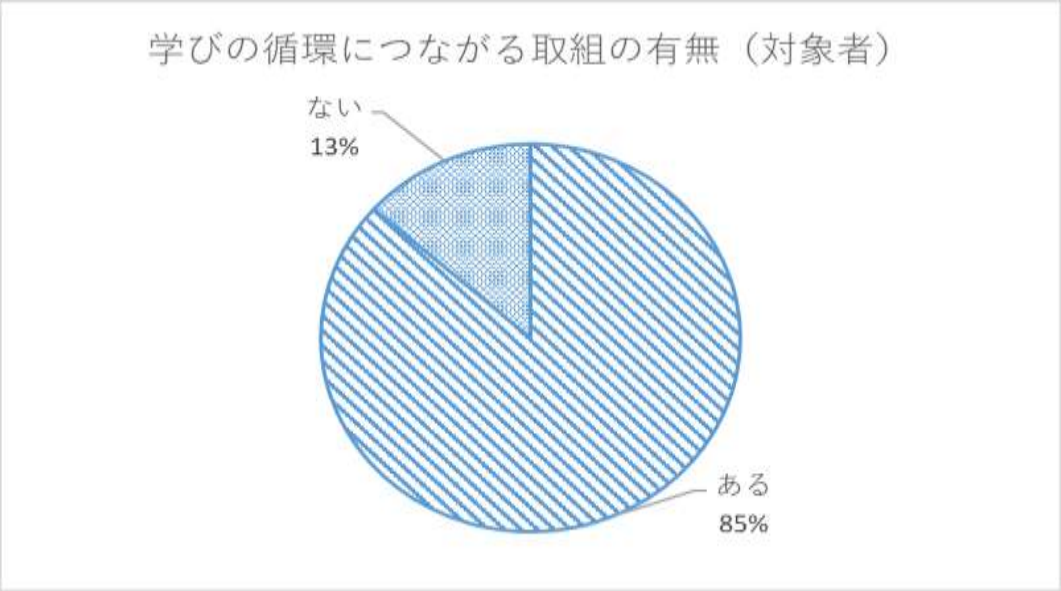
＜他の市民団体、連合体、行政とのつながり＞
・活動中にトラブルがあったときなど子ども子育て事業課の協力を得て解決している。
・様々な分野の多くの方々に本協会の活動を知って頂く事ができる。団体との繋がりが個人へのつながりになり、担い手になることもあり対象者を紹介していただくこともある。
・ボランティア助成に関する情報が入りやすい。他の団体の動きに関する情報も入手しやすい。利用者を紹介して下さる。活動イベントや講演会の情報が得られる。

つながりを持つメリットとして、他の市民団体とのつながりを持つ団体では、「意欲の向上」や「指導法の取得」、「発表の機会の増加」といった内容が挙げられました。また、連合体とのつながりを持つ団体では、「ボランティアの把握」や「地域の顔の見える関係づくり」などが挙げられました。行政とのつながりを持つ団体では、「講座の運営協力」や「講師とのつながり」、「行事の共催による施設との連携」等が挙げられています。

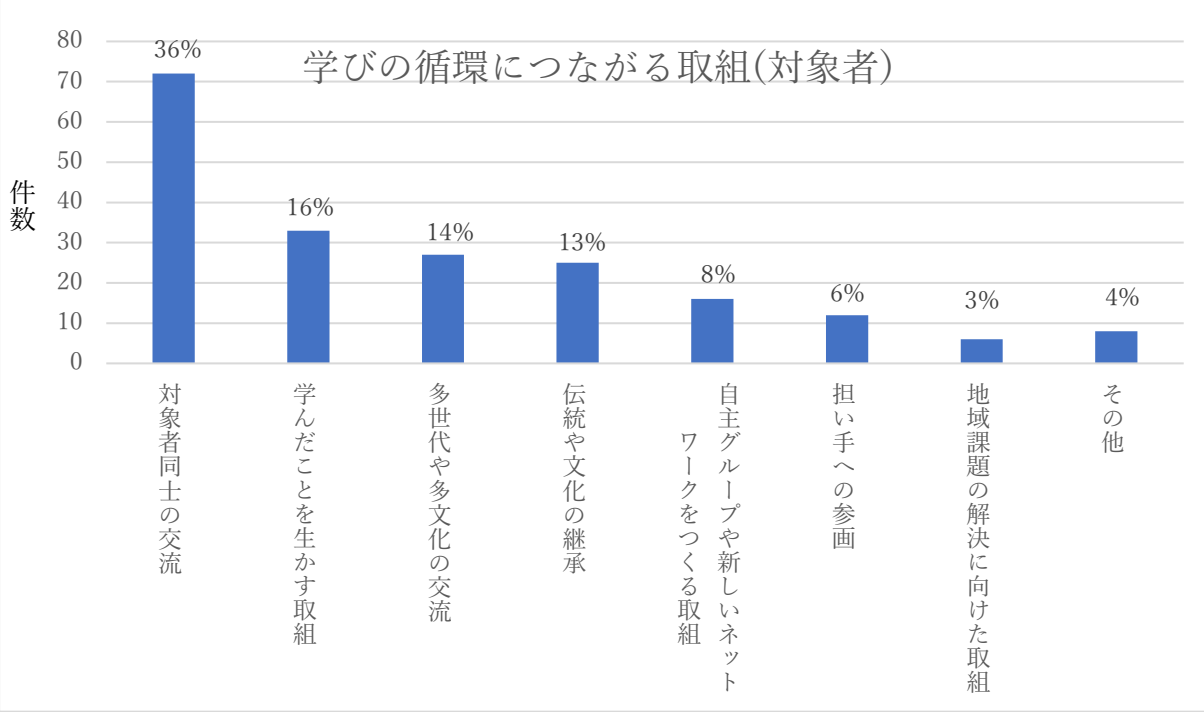
また、重層的なつながりを持っている団体のうち、他の市民団体や連合体とのつながりを持つ団体は「成果の分かち合い」「情報収集」「専門的な助言」といった事項を挙げ、連合体や行政とのつながりを持つ団体では「活動の改善への反映」「市民の要望に即した事業展開」「行事や研修の合同実施」といった内容を挙げています。さらに、他の市民団体、連合体、行政ともつながりを持つ団体では、「活動の課題解決」や「幅広い情報共有」「担い手や対象者の獲得」といった内容を挙げています。

一方、つながりのデメリットとしては、「調整等に時間がかかる」、「会議、役割分担が増える」、「意見が広がりすぎてまとめることが難しい」などの意見が挙げられましたが、意見数としては、メリットの回答の方が多く見られました。

⑤ 対象者にとって学びの循環につながる取組（※複数回答可）



※無回答２件



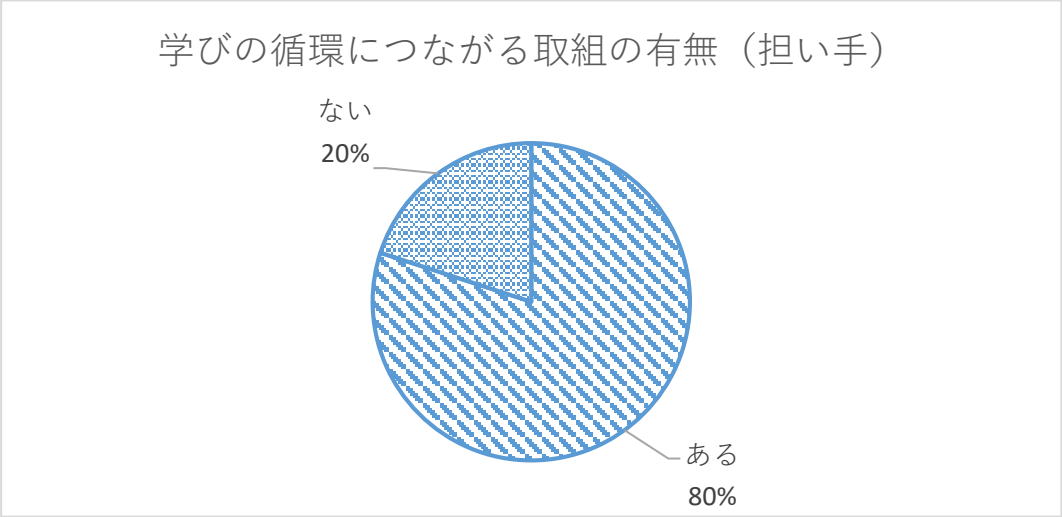
「学びの循環」につながる取組に関する設問は、用語が抽象的でイメージしにくいことから、選択肢を設けた上で、その他「学びの循環」につながる取組と考えられるものがあれば挙げていただくことにしました。

その結果、「対象者同士の交流」を挙げた団体が多く、次いで「学んだことを生かす取組」「多世代や多文化の交流」「伝統や文化の継承」と続きました。また、回答団体数は多くはないものの、「自主グループや新しいネットワークをつくる取組」や「担い手への参画」「地域

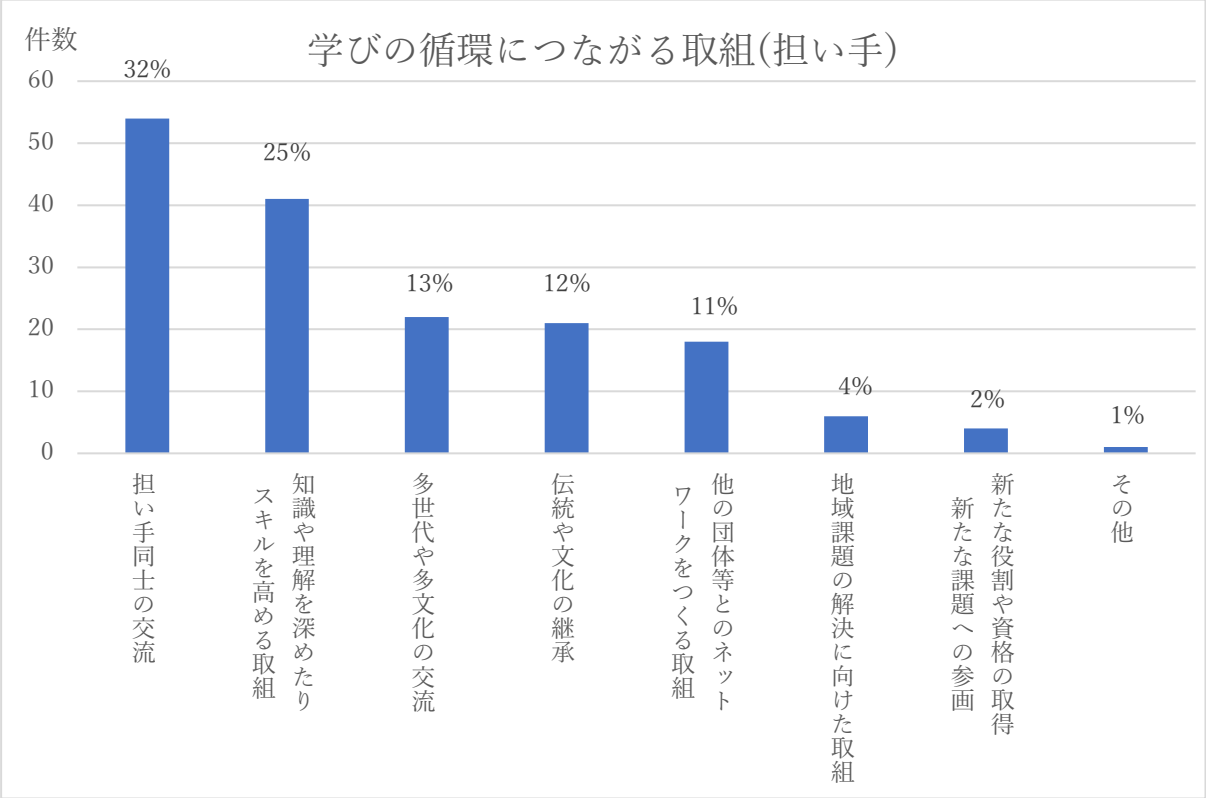
課題の解決に向けた取組」など、学びから新しい取組や参画へと発展する内容を「学びの循環につながる取組」と捉えて活動に取り入れている団体もあることがわかりました。

例えば、「地域課題の解決に向けた取組」を挙げた６団体は、少なくとも「対象者同士の交流」や「学んだことを生かす取組」「多世代や多文化の交流」「伝統や文化の継承」も挙げ（うち２団体は全ての項目が該当すると回答）ており、団体内外の「学びの循環」を広く意識した活動の蓄積が、「地域課題の解決に向けた取組」にもつながっていることを示唆しました。

⑥ 担い手にとって学びの循環につながる取組



※無回答 14 件



次に、担い手にとっても「学びの循環につながる取組」については、対象者の場合と同様、「担い手同士の交流」を回答する団体が多く、「知識や理解を深めたりスキルを高める取組」が続きました。また、「多世代や多文化の交流」「伝統や文化の継承」を挙げた団体も対象者の場合とほぼ同等程度みられ、「他の団体等とのネットワークをつくる取組」も一定数挙がっています。「地域課題の解決に向けた取組」「新たな役割や資格の獲得、新たな課題への参画」といった項目は少数に留まるものの、一定数挙げた団体があることがわかりました。

○まとめ

本調査では、市内で活動する団体は誰でも参加できるよう、広く受け入れをしており、団体の運営はボランティアや参加者自身の手で担われている団体が多いことがわかりました。

活動における他の市民団体や連合体、行政とのつながりについては、連合体や行政との重層的なつながりを持つ団体ほど、「学びの循環」が団体を超えて地域に広がっていく要素をメリットと感じている傾向があることが見えてきました。特に、個別の団体活動へのメリットだけでなく、地域や市内全体の動向へと視野が広がり、活動や運営の協力や学び合い、担い手や対象者の広がりをメリットととらえているようです。

また、活動の中で取り入れている「学びの循環につながる取組」については、まずは当事者自身や当事者間の「学びの循環」を回答する団体が多く見られました。そして、多世代や多文化の交流、伝統や文化の継承、ネットワークをつくる取組など、「学びの循環」の広がりを意識した取組を取り入れている団体も一定程度あることがわかりました。さらに、少数の団体ではあるものの、これらの「学びの循環」の蓄積が「地域課題の解決に向けた取組」につながっている可能性も示唆されました。

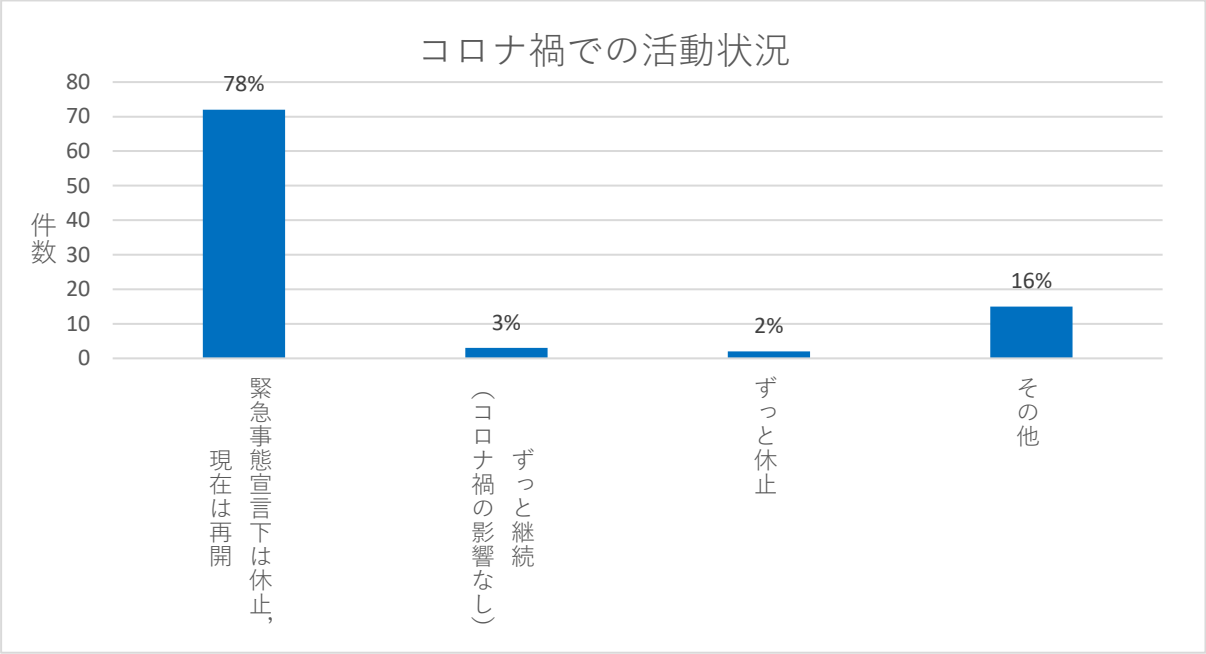
今回調査を行った「学びの循環」については、日頃の活動において意識的に取り組む場合だけではなく、人々の活動を通して結果的に生じる付加価値としての性格を有するものかもしれません。しかしながら、本調査において改めて活動を振り返る中で、このような回答が得られたことは、活動を通して生じている「学びの循環」を構造的に捉える第一歩として有意義であったと言えるでしょう。

２　コロナ禍がもたらした社会教育への影響

コロナ禍における様々な制約のなか、国分寺市で活動する市民団体はどのような影響を受け、またそれを乗り越えるためにどのような工夫を凝らしてきたのでしょうか。

社会教育委員の会議では、コロナ禍で活動を行うために団体が生み出した工夫や新たな手法、さらには先述の「学びの循環につながる取組」に生じた変化について把握するため、アンケート調査の中で関連の質問を行いました。

①　コロナ禍での活動状況



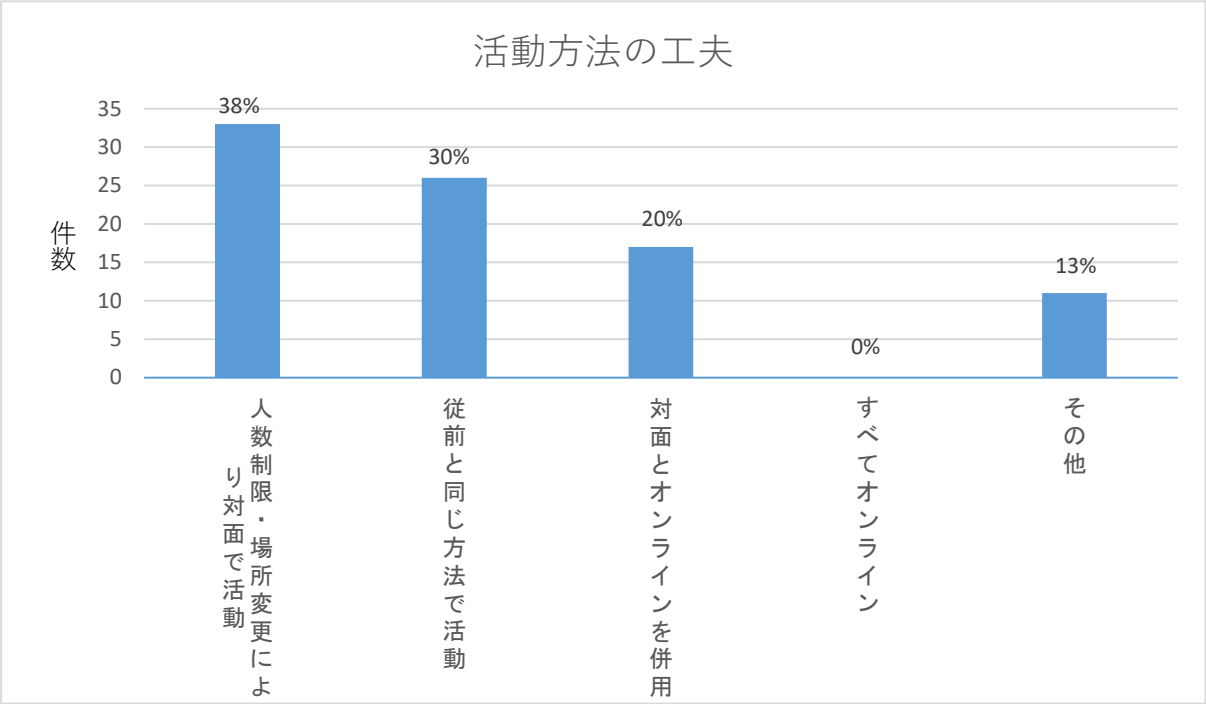
※無回答 10 件

※回答中、「現在」とあるのはアンケート実施期間中である令和３年 12 月時点。

ほとんどの団体が緊急事態宣言下で休止しており、アンケート実施時点（緊急事態宣言解除後）では再開をしていました。「その他」では、通常どおりの活動ではなく、感染症対策として規模を縮小したり一定の制約のもとで活動している、という趣旨の団体が複数ありました。アンケート実施時点では緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発出はされていませんが、発表の場があるときのみ活動し、普段の活動は休止している団体もありました。

また、国分寺市の公共施設は夜間を臨時休館している時期があり、夜間を中心に活動している団体にとって、活動場所がなく活動休止していた、という回答もみられました。

② コロナ禍における活動の工夫

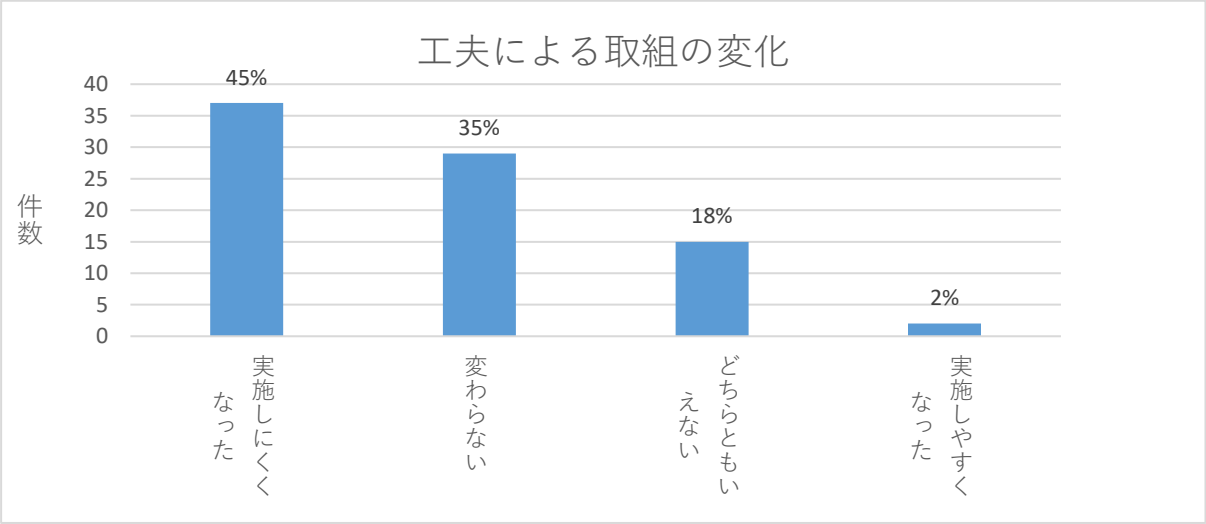


※無回答 21 件

「人数制限・場所変更により対面で活動」「従前と同じ方法で活動」とした回答が多くみられました。対面時間を短くするための工夫や、活動を屋外とする等、様々な対面の工夫をしている様子が窺えました。また、対面でなくてもできることをオンラインに変更するなど、「対面とオンラインを併用」とする回答も次いで多く見られましたが、「すべてオンライン」とした団体はありませんでした。

「その他」では活動の分散や、無観客開催（動画配信）、LINE を活用した予約制の導入等団体の活動に即した工夫が挙げられています。

③ 活動の工夫によって、学びの循環につながる取組はどのように変化したか



※無回答 19 件

「学びの循環につながる取組」の変化については、「実施しにくくなった」と回答した団体が多く見られました。また、その変化の要因や具体的な変化の内容を自由記述で聞いたところ、次のような回答が挙げられています。

特に、「実施しにくくなった」と回答した団体では、部分的な活動の制約だけでなく、その活動が有していた学びの重要な要素やつながりなどに困難さを感じたり、新たな参加者への声掛けのしにくさなども感じており、活動の広がりに影響が出ている様子が窺えます。

【「実施しにくくなった」と回答した団体】

・活動期間が空いてしまい、メンバーが集まりにくくなった。
・演奏の発表はすべて中止となった。
・工夫することにより活動できるようになったことは良いが、シャドー練習に限っているため組んだ時の練習ができない。
・オンライン・ハイブリットを取り入れることにより、参加しやすくなったという人もいるかもしれないが、直接接すること、触れ合うことが必要で大切な事業へ結びつける講座であることを考えれば密を避けるかたちでは十分な学びにつながらないと感じる。
・従来の対面で演奏者と傍聴者が互いに見せ合い、相乗的に共感し、互いにつながりを強く持っていた事業が、無観客配信することにより関係が弱くなった。
・新たな参加者への声かけがしにくくなった。コロナ禍に対する受け止め方、考え方はひとそれぞれなので、こんな時だからこそと言って参加してくださる方もいる。とらえ方がわからない方にこちらからは声かけはしない。

【「実施しやすくなった」と回答した団体】

・少人数で関わることによってつながりが強くなった
・オンラインの活用によってより多くの利用者が講座に参加しやすくなった

【「どちらともいえない」と回答した団体】

・リモートを活用したが、まだ成果がみえていない
・オンラインの実施で、講座などに参加しやすくなる半面、対面でないと参加者同士なかなか関係性を築けないため、活動につながりにくい

④ コロナ禍での活動における課題や困りごと

上記の他、コロナ禍での活動における課題や困りごとを自由記述で聞いたところ、次のような回答が得られました。特に、「対面の交流」や、「オンラインへの対応」に伴う課題、「地域全体を巻き込む」上での課題も挙がりました。

・活動場所の確保
（広い場所の予約が難しい、公民館が利用できないときは別の場所を使用したが利用料が必要のため会費の捻出が必要、といった意見など）
・飲食を含むイベントの開催が難しくなった

・練習以外の活動（会員同士の交流）ができなくなった
・家族に基礎疾患をもっていたり親の介護をしている方はなかなか参加しにくい
・オンラインなどを取り入れたが、そこに対応できない方が参加できない
・オンラインでは担い手同士の活動は可能かもしれないが対象者への活動は実現しがたい
・地域でつながり、みんなで子育てをするという考えからするとコロナで子どもたちに会えなかった１年半のロスは大きいし、どう回復していくかが課題
・地域の人に声をかけて規模の大きい活動を一緒につくることができなかったため、地域との交流があまり進まなかった。地域の人がもつ知識をどのように取り込んでともに遊び場をつくっていくかが課題　など

⑤ コロナ禍での工夫によって、従前より良くなったことや新たに生まれたつながりや活動

逆にコロナ禍での活動の工夫によって良くなったことや新たなに生まれたものを自由記述で聞いたところ、次のようなオンライン導入に伴う「参加者の増加」や「情報発信・共有の広がり」、「活動場所の多様性」、「個別対応の効果」などに関する回答が得られました。

・対面で行っていた地域懇談会をオンラインで開催したことにより、参加人数が例年より多かったように思う。
・オンラインでの講座が多数開催されるようになり、いままで遠いから参加できなかった講座にも参加できるようになった。
・With コロナとしてオンラインによる公民館活動の発信のきっかけとなった。
・プログラムの LINE での告知等、情報網の確立が大きな利点だった。
・SNS、ビジネスチャットなどの活用による情報共有の充実。
・各グループが ZOOM で録画した練習状況を共有したり、同じ曲を歌い踊る機会が持てた。
・父兄の参加、特に父親の参加が増えた。
・屋外、市内での活動が増えた。
・完全個別対応したことで生徒の課題がよくみえた。　など

〇まとめ

これまで見てきたとおり、コロナ禍において、多くの団体が緊急事態宣言下では活動休止を余儀なくされ、再開後も様々な工夫を凝らしながら活動を進めていることがわかりました。その中で「学びの循環につながる取組」については、「実施しにくくなった」との回答が多く見られ、対面での実施に伴う様々な課題が挙げられました。しかしながら、数の上では多くないものの「どちらともいえない」「実施しやすくなった」との回答も見られ、従前より良くなったことや新たに生まれたつながり・活動に関する記述も見られています。

こうした中に、新たに紡ぎだされる手法やそこから生まれる学びの循環を丁寧に捉える意義が改めて明らかになったと言えるでしょう。

３　時代の変化に対応した多様な学びの手法と学びの循環

長引くコロナ禍は、この世界を生きるすべての人々に影響をもたらしている大きな時代の転換点です。社会教育委員の会議では、その中で生まれてきている「小さな変化の萌芽」を見逃さないために、先述のアンケート調査で従前より良くなったことや新たに生まれたつながりや活動を記述した団体に対し、インタビュー形式によるヒアリング調査を別途行うこととしました。調査の概要は以下の通りです。

＜調査対象団体＞

①はらっぱ文庫、②国分寺市プレイステーション（認定 NPO 法人冒険遊び場の会）、③oh!はやし、④NPO 法人国障連喫茶、⑤雪どけ、⑥認定 NPO 法人健康体操指導ワーカーズ、⑦国分寺市国際協会、⑧市立第五小学校（サマースクール）、⑨市内中学校（職場体験）

※⑧についてはコミュニティスクールの取組を、次の「学びの循環に関する５つの観点」で学校に評価していただき，最も高評価であったサマースクールを調査対象としました。

・この活動は児童にとって、新たな学び、体験があるか。
・この活動で得た学びや体験を、児童はその後の生活に活用しているか。
・この活動には継続性があるか(毎年計画的に行われているか)。
・この活動では人とのつながりが多くあるか(同学年、異学年、地域の方々、講師の方々)。
・この活動によって地域活動、ボランティア活動への参加が増えているか。

＜調査時期＞

令和４年１月～４月（必要により５月以降に行った団体もあります）

＜調査者＞　※各委員の活動領域を中心にグループ分けを行い分担

・地域グループ
　根岸、髙島、山崎、森田（令和４年３月まで）、張堂（令和４年４月から）
・学校連携グループ
　飯沼、徳満、岡本（令和４年３月まで）、柿崎（令和４年７月から）
・福祉グループ
　栗木、入江、廣松（令和４年３月まで）森山（令和４年３月まで）

＜主な質問内容＞

① 団体の概要（設立の趣旨や思い、主な活動など）
② コロナ禍での活動（活動の工夫や導入した手法、用いた場面、導入の経緯や理由など）
③ 新たな気づき（工夫や手法の導入によって生まれているもの、つながりの変化、改めて重要だと認識されたことなど）

＜調査結果＞

後日グループごとに整理を行い、重要な要素を次頁以降の１～９にまとめました。

ヒアリング結果１

団体名　はらっぱ文庫　　ヒアリング日　令和４年１月29日

【団体紹介】
学校での読み聞かせから文庫を始め，発足20年，自宅の新築時に文庫の部屋を設け活動している。子どもが好き，本が好きという気持ちで始めた活動がライフワークとなり，仲間ができ，外に発信していく流れもできた。
図書館が読み聞かせの講座や文庫の紹介などの文庫活動を支援してくれているので助かる。保育園・学童保育所・児童館・学校での読み聞かせ活動や，乳幼児の利用が増していることから子育て支援課とも連携している。
【コロナ禍での活動】
新型コロナウイルス感染症の拡大を受け，若い人からの助言でLINEを導入し，文庫に来る人を予約制にした。LINEで本を紹介するなど情報発信をすることで、利用者は事前に文庫のおすすめ本や紹介本のことがよくわかり、貸出時間の短縮を図ることができた。さらに、個人的な本の紹介やアドバイスの時間もでき、オンラインの活用で新しい取り組みができた。
【新たな気づき】
オンラインの活用を進める一方，場所や時間を共有することで本の楽しさを伝えることの大切さ，例えば読み聞かせによる子どもの表情や笑う所や悲しい場面の共感など，従前の対面での活動の必要性をあらためて感じている。
本が好きという気持ちを次の世代に繋げていく循環が生まれている。図書館から遠い地域なので，その一助になればと思っていたが，緊急事態宣言時の図書館休館時には本を借りたいという人からの連絡が増えた。
公民館などの施設で，画面（モニター）を通しての読み聞かせや呼びかけを多くの子どもたちにできるように，オンラインなどの設備の拡充や施設の工夫を期待している。
また図書館の空白地帯なのでぜひ図書館をという思いがますます強くなっている。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
対面	学校・児童館・学童・保育園での読み聞かせ活動	感情の共有で仲間意識 乳幼児にも対象が広がる 本への興味・地域への関心がうまれる	地域に出て行くことで，活動が周知され図書館の益々の支援や子育て支援課など行政とのパイプができる
オンライン	LINEで文庫に来る時間帯の予約	密の回避。時間の短縮	事前に来場者がわかっているので文庫での個々人への対応がわかりやすい
	LINEでの本の情報発信	本の紹介やアドバイスなど個人への対応が可能	来場者との距離が縮まり繋がりが強化
ハイブリッド	文庫でのおはなし会	LINEを利用して予約制を導入	対面ならではの共感から生まれた伝達し合う力
		時間や場の共有から生まれる楽しさを分かち合う	

ヒアリング結果２

団体名　国分寺市プレイステーション（施設名）　ヒアリング日　令和４年３月22日

【団体紹介】
　認定NPO法人「冒険遊び場の会」による運営で，西元町から現在の東戸倉に移転し，2020年６月にオープンした。０歳から18歳までが遊べる常設の施設であり，開設後も「駄菓子屋」や「Caféどーにっち」「夕暮れカフェ」など，幼児から中高生までを視野に入れた事業が敷地内にオープンしている。

【コロナ禍における活動】
　開園が６月に延期され，その間に子どもと手紙のやり取りで意思の疎通を図るようにしてきた。スタッフ同士のWeb会議や自己紹介，利用者のオンライン相談の受付なども行った。人数制限をしたことにより，来場者とは顔が見える関係づくりができている。

【新たな気づき】
　「遊び」をとおして創造する楽しさを生み出す場所は，子どもや親が集う安心できる「居場所」として，新たな繋がりの連鎖を育み，互いに学び合う機会が創出されている。「遊び」に集う異年齢の子ども，親や地域住民を取り込んでの仲間意識が生まれ，互いに影響し学び合える関係性が、次世代へと引き継がれていく。
　現在スタッフは43人。「遊び」の運営・子育て支援・遊び場の普及・まちづくりなど４つの分野に活動が広がってきている。この施設での経験と，そこに集う人やスタッフからの助言で，主体的能動的に過ごすことの大切さやその意義に気づいて，スタッフやボランティアになる人がいるおかげである。
　施設の特性から，まずは安全と安心が担保することが重要であるが，さらにさまざまな気づきを与え行動を起こさせる場としての役割を担っている。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
対面	子どもの遊び場	安心感を居場所で得られ， 居合わせた子との繋がりで 遊びを通した異年齢交流	自己肯定と相互認証から生まれる関係性の広がり 仲間同士で学び合う繋がりの連鎖
	親・保護者の集いの場	居合わせた者同士の繋がり 仲間づくり 受動的から能動的主体性の気づき	スタッフとしての社会参加
人数制限	集会場	ひとりひとりが良くわかるようになり繋がりが強化	当事者の安心感からの繋がり
手紙・電話相談	緊急事態宣言時	文面での意思疎通で気持ちを繋ぐ 人伝いからの安心感をえる。	信頼感からの孤立払拭
オンライン	WEBスタッフ会議	意思疎通と安心感	スタッフ同士の学びと理解の広がりで体制強化
	カウンセラー、助産婦へのWEB相談	問題や困りごとの把握共有 相談者の安心感	地域や住民の現状からの事業考案 行政への提案
	LINEでのメンバー紹介	繋がりの強化	孤立の防止

ヒアリング結果３

団体名　ｏｈ！はやし　　ヒアリング日　令和４年４月８日

【団体紹介】
　並木公民館で活動している団塊世代のメンバーと地域に加わった若い世代のコミュニケーションをとれる活動は何かないかと考え，地域で途絶えていたお囃子の復活に取り組んでいる。
　結成５年目であるが，地域のお囃子経験者や市内の囃子連の指導を受けて公民館まつりやくぬぎ教室で披露している。指導者の熱量が伝えていく力となって，20年30年と継続していくことを目標に活動をしており，それが「学びの循環」になっていくと考えている。

【コロナ禍における活動】
　公民館が緊急事態宣言時に休館している時も，定例活動をする場所を確保することができたため，新型コロナウイルス感染症拡大の影響を直接受けることはなかった。しかし，発表の場の確保ができなかったことで新たな繋がりをつくることはできなかった。

【新たな気づき】
　経験者から若い世代の人や子どもへと繋がる地域の文化継承の循環が生まれてきているが，その要因としては「楽しいことを一緒に楽しみ伝えていきたい」という思いと，お囃子の指導者がいて，活動場所が確保できていたことが大きい。
　コロナ禍でも太鼓の練習はできたが，笛の練習は飛沫防止のためできないなど課題はあるが、今のところみんなで集まりアナログで活動進めていくことにしている。お囃子は，息を揃えて取り組むことで成り立っているため，オンラインではなかなか難しいが，個別の練習（太鼓・笛など）であればオンラインでも可能ではないかと考えている。
　公民館などで，高齢者も気軽に利用できるオンラインの設備が整えば，広く発信し，若い世代の人に参加してもらえるようなことも考えられる。披露をすると参加者に喜ばれるので，地域の新たな拠点でも披露できるように発展させていきたい。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
場の活用	公民館で集うそれぞれの仲間	語らう中で地域意識の芽生え 地域課題への気づき	仲間との新たな試みが生む繋がりの形成
場の確保	地域で集う場所探し	定例で集うこと，披露することで思いの共有から楽しみが連鎖 しかし発表機会が無いと新たな繋がりはできにくい	世代を超えた仲間との信頼の強化 披露し周知することでの仲間作り
指導者探し	伝承	お囃子の復活 伝えていく力とその熱量での持続と継続	昔からの手法で痕跡を残すことで地域文化を伝承 若い世代への期待の広がり
対面	練習	息づかいや間合いといったものへの気づき	練習の大切さを認識し集う意欲が増加

ヒアリング結果４

団体名　NPO法人国障連喫茶　　ヒアリング日　令和４年５月12日

【団体紹介】
障害者の自立と就労を支援し、障害者と支援スタッフが共に活動する場（地域活動支援センターⅢ型）として国分寺市の委託を受け本多公民館とひかりプラザ内で活動している。支援スタッフが専門職でないことを強みと捉え、専門家や機関とつながり助言を得るようにしている。

【コロナ禍での活動】
緊急事態宣言下では、公民館の休館に伴い喫茶も３か月休業を余儀なくされた。その間、障害を持つ従業員（以下従業員）の方たちの安否確認や困ったことがないかの確認のため、一人一人事務所へ来てもらい支援スタッフが話を聴き、週１～２回は電話による対話も行った。
令和２年３月、他団体の主催講演会「新型コロナウイルスを正しく恐れる」にスタッフが参加し、従業員・スタッフがコロナについて正しく知り行動できるようにすることを心掛けた。行動の定着まで時間がかかったが、今後に向けて課題を支援スタッフで話し合いながら活動を変化させた。
外部との打合せはオンラインも活用したが、支援スタッフ会議や従業員とのコミュニケーションは伝わり方に齟齬が生じないよう対面で行い、言ったことを確認し合うために書き、可視化することを基本とした。喫茶の利用客は３０名から１０名に減らし、消毒などの「ルールの徹底」と「ゆっくりでいいから安全が一番」であることを最も重視し確認し合いながら進めた。従業員からのSOSの出づらさはあったが、安全に生活を維

【新たな気づき】
従業員の生活を守るために、支援スタッフと従業員の間でルールを再構築していく循環が生まれ、結果、安全につながることができる新たな環境が出来上がった。社会全体が「ルールの徹底」を重視するようになったことで、障害者も健常者も同じ土台に立てたような気がするという声も聞かれた。また、従業員にとっては就労の場であるが、家での生活でわからなかったことも持ち寄り皆で考え学び合う場ともなった。元々市民の思いで立ち上がり、公民館という場で市民に触れ合いながら行う活動であり、常に学びを取り入れてきた生涯学習の場としての素地も役立てられたのではないかと思う。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
オンライン	外部機関とのミーティング	困りごとへの助言体制の拡張	支援スタッフの学び、団体の支援体制の広がり
対面・書面	スタッフミーティング、従業員とのコミュニケーション	当事者目線の困りごとの把握・学び合い	当事者の就労＝学び（生活と学び）の循環 学び合いのルールへの反映
ルールの徹底	喫茶運営	安全につながれる新たな環境	障害者と健常者の対等性
公民館の場の活用	喫茶運営	市民との触れ合い 学び合い	当事者の社会参加 相互理解・生涯学習

ヒアリング結果５

団体名　雪どけ　　ヒアリング日　令和４年３月30日

【団体紹介】
　子どもたち・若者の「自分らしく生きる」を応援するボランティア団体である。主に、不登校や引きこもり等社会参加が難しいと感じている子どもたちや若者が「ありのままの自分」で過ごせる居場所作りをしている。また、不登校や発達障害者や外国にルーツのある等の背景要因で学習に困難を抱えている子どもたちが希望する学び直しの学習支援も行っている。

【コロナ禍における活動】
　コロナ以前に大切にしてきた語らいや「ティールーム」という保護者の悩みの共有の場が実施しにくくなったが、コロナ禍でも活動自体は途切れさせることなく行った。そんな中、苦肉の策で誕生したのが「雪どけオンライン広場」である。毎週木曜日の夜にスタッフや卒業生や現在支援している子どもたち、保護者等で話をしてつながりをつくっている。その結果、家から外へ出られない子どもたちもオンラインで繋がることができた。以前利用していた子どもたちが若者になり、その方たちがオンラインに参加し語ってくれる機会も増え、子ども同士や子どもたちと若者の繋がりが新たたな出会いもできてきた。
　また、スタッフミーティングや他の支援の場でのケースに学ぶ機会はオンラインで行い、知識を高め子どもたちへの対応につなげることができている。

【新たな気づき】
　学校や公的支援の狭間の子どもたちの居場所がないため、その居場所を求めて行きつく場所が雪どけである。例えば学習の遅れがあるが経済的事情で塾には行けない、あるいは低所得家庭ではないため生活困窮者のための支援が望めないなどの狭間にいる子どもたちの居場所の必要性を改めて感じた。特に温かい人との関わりを必要としている子も多いので、オンラインでできることもあるが、対面で会える、来られる場があるということの重要性を感じている。
　一方でオンラインの活用により巣立っていった利用者との交流が生まれたことで、スタッフや今いる子ども・保護者にも心のゆとりや安心感が生まれているように感じる。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
オンライン	スタッフ・卒業生 子ども・保護者の対話	外出できない子どもとのつながり 子ども同士のつながり 子どもと若者のつながり	アウトリーチの広がり・孤立防止 ピアサポートの広がり 当事者経験の社会還元
	スタッフミーティング 他の支援の場のケース検討	スタッフの知識の向上 他団体とのつながり	支援スタッフの学び、団体の支援体制の広がり
対面 （中止・縮小）	保護者面談「ディールーム」	語らいの重要性の再認識	（当事者の視点・理解の広がり） （ピアサポートの広がり）
対面	学習支援 居場所・趣味活動	語らいの重要性の再認識	当事者の安心、社会参加の広がり

ヒアリング結果６

団体名　認定ＮＰＯ法人健康体操指導ワーカーズ　ヒアリング日　令和４年３月15日

【団体紹介】

「健康寿命を延ばす効果のある体操を身近で気軽に行えるように自主グループをつくる支援をし、最後まで自分らしく社会の一員として生きられる人を増やし暮らしやすい社会をつくること」を理念とし、①健康づくり体操事業、②健康づくり体操に関する体操事業、③指導者の養成、④自主グループづくり支援の四つの事業でスタートをした。

自主生活体操クラブにおいては高齢者の方に必要な運動を取り入れた総合体操を、公民館や地域センター等市内の施設を利用し31か所で活動している。

【コロナ禍における活動】

理事を3人に減らし緊急対応に備え、対面でいつでも会議が開け、スタッフの状況など全体像を把握できるシステムを作ることができた。スタッフ会議は対面による意思確認が必要と考え、感染対策を徹底し月１回対面で行い、指導員の在宅ワークも行った。緊急事態宣言下では３か月間活動が休止し、会員160人が退会、高齢者にとって体力低下の要因になりえる環境となった。

活動再開後は会場利用の工夫として、人数を半数にしたり、会話を避けるため椅子に座ったら席を立たない等のルールをつくった。

また、高齢者の行き場がなくなり、体力低下が認識され、自主的に家で体操を行う動きも見られた。その際会員同士が声を掛け合いお互いを励まし健康を保つ意識が高まるなど、受け身から自発的に行動できるようになった。自分の健康づくりの必要性を通して他者のことも自分事として受け入れ、支え合える関係に変化してきた。休館中の公共施設以外の活動場所として、公園に目を向けることができた。施設利用再開後も気候が良ければ公園も利用している。

【新たな気づき】

在宅ワークにより各会場での活動後に事務所で整理していた記録を家や会場で行うことで、スタッフ自身の振り返りもできるようになった。対面による運営決定は重要なコミュニケーションの場の再確認につながった。

参加者に関してはコロナ禍によって雑談ができなくなり、雑談をすることによって人と人の繋がりが深まっていくことが改めて分かったと語っている。しかし、活動は個別でも互いに励まし合ったり、公園という身近な場所の良さに気付き自発的な活動を加速させた。

元々、体操による自身の身体の変化への気づきから口コミで参加の輪が広がり、社会とのつながりが元気を生む、そして社会とつながりつづけるためには元気でいたいという好循環から活動が継続されてきた。そうした素地が、コロナ禍における主体的な活動の模索にも役立てられたのではないかと思う。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
理事のスリム化	運営	会議の機動性の向上 全体把握システムの構築	担い手の意思疎通
スタッフの 在宅ワーク	運営・記録	スタッフの振り返りの充実、責任感の向上	担い手の拡大、質向上
対面	スタッフ会議	意思確認・コミュニケーションの重要性の再確認	担い手の連帯感の向上
活動時の自宅の 活用と声掛け	健康体操	雑談の価値の再認識 連携による健康意識の向上 受け身から自発的に	ピアサポートの広がり 高齢者の能動性・活力の広がり

ヒアリング結果７

団体名　国分寺市国際協会　　ヒアリング日　令和４年３月30日

【団体紹介】
平成３年に発足した「国分寺市の国際化を考える市民懇談会」の報告書をきっかけに設立準備会が設置され、設立した。地域での国際交流、地域に住む外国人支援、地域の国際理解推進活動を行っている。具体的には、日本語教室、国際理解講座、外国にルーツのある児童生徒の日本語学習支援、ボランティアの養成講座や互いの文化を理解し合う活動など。参加者の困りごとから立ち上げる活動も大事にしている。

【コロナ禍における活動】
緊急事態宣言下ではオンラインを中心に日本語教室を行った。メリットは家にいながら誰もが参加できることであった。また、在宅で社会とのつながりがなくなり、外国の方が孤独になっている現状も見えてきたため、オンラインと対面というハイブリッドの対策を取った。オンラインを広めるために令和３年１月にＺｏｏｍの使い方講座（スタッフ対象）を実施し、会員約300人のうち80人が参加した。
しかし、オンラインでは雑談からうまれる人の繋がりがつくりにくいことも分かってきている。一度対面で繋がった人々の交流には新たにLINEを取り入れたりと、対面とオンラインの良さを生かしながら進めている。

【新たな気づき】
ハイブリッド対応は今も行っているが、対面で実施していても、まん延防止重点措置が発出された時にはオンラインにするなど、状況に応じた実施の仕方を即座に判断している。柔軟に対応をしていると参加者から「雨だから・寒いからオンラインで」などの要望もあるが、地域での人と人とのつながりを大切にするため、対面での活動を基本としている。
久しぶりに対面で実施したときは多くの参加があるなど、「雑談」や「対面」の価値が高まっているように感じる。公民館で実施しているため、これまでも関連の公民館利用団体に取組を知ってもらったり、参加者に他の団体を紹介したりすることもできた。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
オンライン	日本語教室	家にいながら誰もが参加できる 雑談できず繋がりにくい	参加対象者の広がり 参加形態の選択肢の広がり 参加者同士のつながりの喪失
	Zoomの使い方講座	スタッフの学び	スタッフの学び・開催の選択肢の広がり
ハイブリッド	日本語教室	参加者の都合や時と場合に応じた開催・参加形態が選択できる	孤立防止 開催・参加の形態の選択肢の広がり
公民館の利用	活動全体	他団体とのつながり、情報共有 公民館職員とのつながり	団体の支援・情報共有体制、参加者の参加活動の広がり 団体から公民館への取組提案

ヒアリング結果８

団体名　国分寺市立第五小学校（サマースクール）　ヒアリング日　令和４年４月21日

【団体紹介（事業紹介）】

国分寺市立第五小学校はコミュニティスクールとして地域と共にある学校を目指している。各学年でも毎年4～５の活動を地域の人々や各施設と連携して行っている。今回ヒアリングに臨むに当たり、学びの循環の芽生えとなっている観点をもとに予備調査を実施した。その観点とは①その学習に新たな学びや体験があるか。②学んだことが生活でも活用できるか。③その活動に継続性はあるか。④人とのつながりは深くなるか。⑤地域活動やボランティア活動につながるか。の5点である。数値化した結果「サマースクール」が最も高かった。「サマースクール」とは夏休み初めの5日間、地域の講師等に来ていただき、10講座近い様々な内容で、自分の選んだ活動に取り組む。

運営面では教師が担当するが、地域の講師の先生も毎年多く来られている。日頃の授業にはない新しい学びがあり子供たちも楽しみにしている。講師の方々や友達同士で力を合わせ様々な体験学習に参加している。

【コロナ禍での活動】

コロナ禍により開催が危ぶまれた時期もあったが、昨年、一昨年とも予定通り行われた。マスク着用、手指消毒、用具の消毒をしっかり行うとともに、各講座においては人と人との密を避け、ソーシャルディスタンスをとった会場を用意した。今年度も更なる感染対策を行い実施する予定である。

【新たな気づき】

シャボン玉づくりでは子供だけでなく保護者も参加して、大きなシャボン玉に自分の体をいれていた。絵手紙づくりでは作ったハガキを暑中見舞いにして投函し、生活との関連付けがなされていた。また、高学年では天体観測に興味をもつ子供が多いようで、学校の授業とは異なり実際の天体望遠鏡の使い方が学べることに人気があるようだ。

自分が選べる学習であること、新たな学びがあること、人とのつながりができることなどが子供たちの主体的な学習につながっている。またそれらを支える講師の方々の力も大きい。毎年行われている行事で子供たちも発達段階に応じて講座を選ぶことができ、サマースクールを楽しみにしている。長い間継続してきた行事で、新たに講師となる保護者も出でいる。学校教育と連携して、社会教育としての学びの循環の芽生えとなっている。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
対面・体験活動	友達同士 講師と子供	新たな学び 次回への期待	継続性 講師の広がり 友だちの広がり 生活への広がり

ヒアリング結果９

団体名　市内中学校（職場体験）　　ヒアリング日　令和４年７月26日

【団体紹介（事業紹介）】

市内中学校では、３日間の職場体験を、１年次実施校が１校、２年次実施校が４校ある。概ね２～６名くらいのグループで、コンビニや商店、公民館や図書館、消防署、市役所などの公共機関、保育園や幼稚園、高齢者施設や病院など多岐にわたる事業所で、中学生の出来る範囲での作業や企画立案などを体験している。

体験の前には、事前学習で様々な業種について調べ、事後には体験を新聞にまとめるなど行い、クラスや学年で報告会を実施している。

普段あまり関わりのない事業所での体験を通じ、地域を知ることで得られる関係性の循環が起きている。社会教育施設では、生徒が事業の企画を立案し、実際に採用され実施されることがある。その経験から新しいユーザーにつながるという、学びの循環がみられる。また、実際に体験した職業に就いた卒業生もいるという事例から見られる将来への循環や、体験から自分に自身がもてるようになる等、自己肯定感が高まることで起こる自己成長への循環もみられる。

【コロナ禍における活動】

コロナ禍での２年間は職業体験の実施ができていないが、それに代わる授業として、ハローワークの方の講演や、地域の働く人の話を聞く会などの指導が行われている。

【新たな気づき】

職場体験ではないが、授業におけるオンラインによる手法は、今まで話を聞くことが難しかった人も選択肢としての一つになるので、設備の充実化を図ることがより良い学びの循環につながると考える。

手法や工夫	場面	生まれているもの・変化	循環
事業所での体験	地域との関わり	普段関わりのない地域を知ること	関係性の循環
会教育施設での体	施設との関わり	新しいユーザーにつながる	学びの循環
社会での体験	社会との関わり	体験した職業への就職 自己肯定感の高揚による自己成長	将来への循環 自己成長の循環

〇まとめ

各団体のヒアリング結果からは、それぞれに共通の「流れ」が見えてきました。

まず、緊急事態宣言下など、活動の休止を余儀なくされる緊急時の対応の手段としてオンラインが用いられるようになり、主に運営におけるミーティング（スタッフ同士の打ち合わせや外部の関係団体・機関等との打ち合わせなど）を中心にオンラインミーティングツールが活用されました。

そして、緊急事態対応としてだけでなくオンラインを活用した新たな事業活動として発展していくケースが見られます。例えば、文庫活動において、対面時間を減らすためにLINEによる貸し出し事前予約システムを導入したことで、本の紹介や個別相談などが可能になり、「担い手と対象者の交流」をより盛んにする取組へと発展しました。また、不登校等の子どもたちの居場所づくりでは、苦肉の策で始めたオンライン広場が、外出できない子どもたちの参加や、卒業生の若者と現在在籍している子どもや保護者の交流を生み、「孤立の防止」や「対象者同士の新しい交流」につながりました。さらに、学校で進められた一人一台端末によって、遠隔地や地域と中継を結び情報をリアルタイムで見聞きできることで、ゲストティーチャーとは違った「学習資源の広がり」が生まれる効果も見られています。

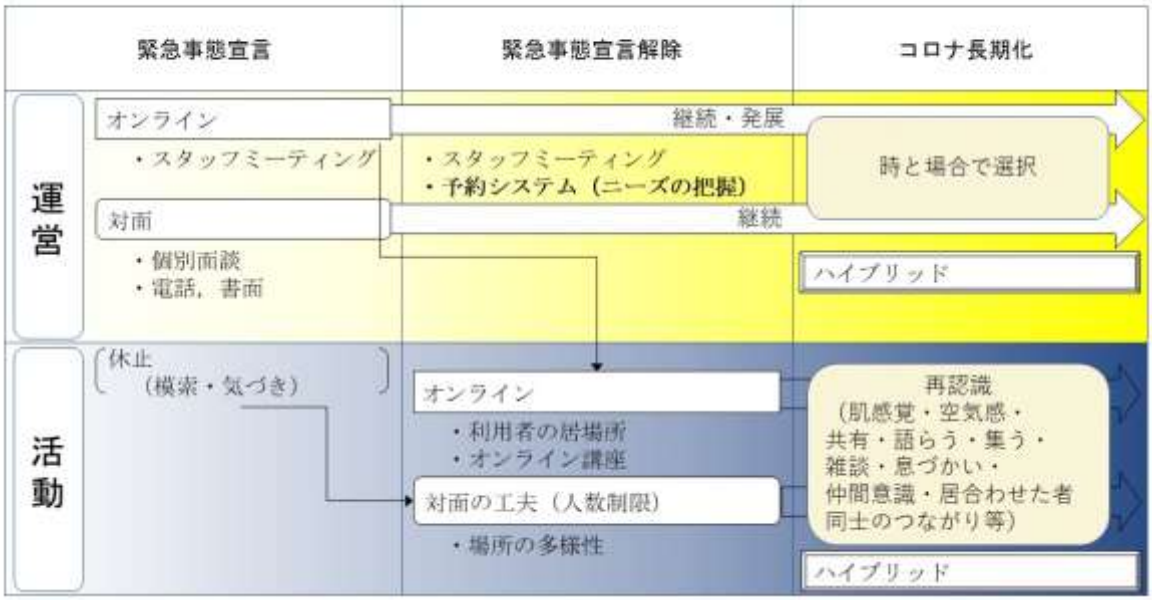
他方で、緊急事態の対応として必ずしもミーティングにオンラインが用いられたわけではありません。例えば障害者の団体では、スタッフ一人ひとりに個別の面談を行ったり疑問点を書き出すことでコミュニケーションの祖語を減らしたりする取組が見られました。子どもの遊び場に関わる団体では、子どもとスタッフ間で手紙のやりとりを行うなどの取組も見られています。こうした対面や書面を通して「担い手の交流」や「担い手と対象者の交流」をより丁寧に行い「個別のニーズの把握」ができるようになりました。また、ルールの徹底や対象者の人数制限を行うことで「障害者と健常者の対等性」や「安心感からのつながり」も生み出しています。

その後、コロナ禍のまま一定期間が経過し、オンラインのまま継続するものと対面のまま継続するもの、さらにはオンラインと対面を合わせたハイブリッド様式も多用されるようになりました。

例えば、緊急事態対応として導入されたオンラインミーティングツールは、利便性の高さから継続され、スタッフが各々の事情や天候等を考慮して機動的に対面様式と使い分けたり、他団体や専門家との交流を広げたりしました。

対面で継続されたものは、各団体が工夫を凝らす中で改めて重要であると再認識されたものです。特に対面が重要であるとされたものとしては『肌感覚、空気感、共有、集う、語らう、雑談、息づかい、仲間意識、居合わせたもの同士のつながり』などがあります。例えば、本の読み聞かせにおける「笑い」や「悲しみ」の場面など、同じ時空間だからこそ伝わり合うものや、お囃子など息を揃えて取り組むことで成り立つものなどです。しかし、だからといってすべてが対面で継続されたのではなく、例えば太鼓や笛ごとの個人練習にはオンラインの可能性が見いだされるなど、取組の真髄をより引き立てるためのオンラインとの併用が模索されていることが注目されます。

ヒアリングから見えてきた運営と活動の流れ



これらの工夫から、何が生まれ何が再構築されているのでしょうか。それは、決して「オンライン」が新しい手法であって、そこから生まれるものの中に新しい社会教育が見いだされるといった単純な事柄ではありません。むしろ、コロナ禍の制約の中、市民一人ひとりが、自身の関わる活動に寄せてきた思いや大事にしてきたものに気づき、この難局を乗り越えるようとした姿にこそ「学びの核」があります。そして模索の過程で講じた様々な手法の立体性の中に、新しいつながりや循環を見出そうとするものです。

その点を念頭に置きながら、ここでは次の四つの視点を挙げて、工夫の中で生じた「学びの循環」を整理します。

一つ目は、**「活動の“個性”や“価値”の再創造を巡る学び合いの循環」**です。

コロナ禍では活動に関わる者が、「この活動の真髄は何か」であるかを皆で考え、感じ、確認し合う中で、その活動の個性や価値を主体的に再確認・再評価しようという動きが積極的に取られました。またその個性や価値の実現のために必要な参加や学びの手法は何か、それを支える運営や担い手はどうあるべきかを試行錯誤する中で、その個性や価値を再創造する動きが見られています。その過程で人々の思いや熱量が伝搬し合い、「担い手や対象者（仲間）のつながり」が再構築され、「学び合いの循環」が加速していると言えるでしょう。

二つ目は、**「活動を支える人材の多様化から生まれる循環」**です。

端的には「担い手や対象者のすそ野の拡大」とも言えるかもしれません。オンラインは、外出が難しい方や様々な事情を抱える方の「部分的な参加」や「選択的な参加」を可能にしました。また、若い方の意見を取り入れたり、様々な手法を組み合わせる中で「組織運営の柔軟性」も生み、活用を支える人材が多様化しています。

そしてオンラインだけでなく、書面や対面による個別の対応、ルールの徹底は、「当事者目線の共有」や「参加者−担い手の対等性」などを生みました。

従来、団体主義や対面での集いを前提とした活動では、経験年数や活動の技能等に応じて「重鎮」と「新参者」のような人材の序列化が生じたり、担い手の不足や参加者の固定化に陥ったりすることも珍しくありませんでした。様々な手法の検討の中で、年代の違いや個々の事情を大切にし、多様な参加形態が可能となったことで、これまで参加の無かった層への「すそ野の拡大」が見られています。このように、活動を支える人材がそれぞれの多様性を生かして支え合うことで、学びもまた型や枠を超え、多様性が循環し合うものとして捉え直されつつあるのではないでしょうか。

三つ目は**「活動の場の多様化から生まれる循環」**です。

コロナ禍では、公民館などの「場」だけでなく、オンライン、自宅、公園など様々な「場」を活動の場面ごとに使い分けたり、組み合わせたりするようになりました。人々の「集い」も施設に一堂に会すだけでなく、各々の生活空間から「オンライン」上で対話をすることが可能になりました。このことは、単に参加形態を多様にしただけでなく、できる場所でできる活動を行うという「活動の持続性」や、それぞれの「場」が持つ「学びの資源の多様性」を生みました。また、改めて「対面」という「場」が重要であり、それが身近な地域で実現できる社会教育施設の価値も見直されてきています。こうして多様な「場」を行き来できることで、個人の学びと集団での学び、発表・還元場面での学びに連続性が生まれ、それぞれを豊かにする循環を生み出していると言えます。

四つ目としては**「「学びの循環」の広がり方の多様性」**です。

団体が取り入れている「学びの循環につながる取組」は、団体内の「参加者や担い手の交流」から「学びを生かす」ことへ、そして「多世代・多文化交流」や「伝統・文化の継承」、「ネットワーク形成」、「地域課題解決」へと発展していく傾向を示していました。団体活動を育むことで、個人の学びの循環が地域や社会に還元され、広がっていくことが目指されてきた中では、その企図が達成されているとも言えます。コロナ禍が生み出した変化は、団体内での学び合いから地域に視点を広げていく学びの循環だけでなく、各々がオンラインも活用しながら外部とのつながりを多様に拡げ、団体内の学びにも生かすような、一人ひとりの結び目から広がる学びの循環も加速するでしょう。また、社会問題などをテーマとした全国的・国際的なネットワークへのオンライン上での参加経験を生かして身近な地域に新しい活動を起こすような、広域のネットワークから地域の取組が生まれていくプロセスもあるでしょう。このように「学びの循環の広がり方が多様化し、多様な複数の循環が行きかいながら活動が発展していく様相が想定されます。

４　「広がる」・「超える」・「届く」～これからの社会教育に向けて

前章で見てきたような新たな「学びの循環」は、これまで社会教育が生み出してきた「つながり」や「学びの循環」の重要性を再確認しながら、社会教育の活動に新たな息吹をもたらしていると言えます。これらが今後の社会教育をどう形成していくのかを言葉にすることは容易ではありません。しかし敢えてキーワードを挙げれば、次のようなことが言えるのではないでしょうか。

例えば国分寺市の公民館が掲げてきた基本的な考え方は**「つどう（集う）・つなぐ（繋ぐ）・つくる（創る）」**ですが、これに加わるキーワードとして表現すれば、新たなつながりの形態として**「行きかう」「交わる」「重なる」**といった要素が重要な役割を果たすことが考えられます。またそのつながりを通した学びにおいては**「広がる」「超える」「届く」**といった循環の要素が加速していくでしょう。

そして、これらの駆動力の根源として、人々の対面での「語らい」や「肌感覚」などの重要性が再認識されたことも重要です。コロナ禍における新たな手法の導入ではオンラインが着目されがちですが、むしろ身近な地域で「対面」の集いが可能な社会教育だからこそ、「オンライン」の学びと「対面」の学びを日常的につなげることができ、個人と集団、生活空間と学習空間、社会教育と学校教育や家庭教育、ローカルとグローバルなどを行き来しながら学びや交流を広げていくことができる強みを発揮できると考えられます。

これらを踏まえ、新しい息吹を確かなものにしていくために、今後の社会教育行政に求める役割について、次の５つを提言します。

（１）学びの情報と交流のプラットフォームの形成

①　「学びが循環するまち国分寺」の“設計図”を描く市民会議の発足

各団体の“個性”や多様な手法を市民が知り、学び合うための情報と交流のプラットフォームが必要です。例えば、今後の**「学びが循環するまち国分寺」**をオンライン上で描き、誰もがアクセスできるようにすることなどが求められます。

そのため、子どもから高齢者、障害のある方や外国籍の方など多様な人々から成る市民会議を発足させ、設計図を市民の手で描く取組を求めます。また、その際、属性ごとの小さなコミュニティや横断的なコミュニティの形成、所掌横断的な行政職員の参画などの重層的な会合形式を構築することを提言します。

②　学びの情報と交流のプラットフォームにおける市民の参画と学校・行政との協働

プラットフォームが機能するためには、“生きた”社会教育活動の反映が欠かせません。そのため、セキュリティの担保の上で共通のクラウド等を設定し、各団体の書き込みを可能にするなどの市民の参画やGIGAスクール構想との連動、民間企業等との連携、所掌横断的な行政職員の組織化を求めます。市の YouTube アカウントや市の広報番組「ぶんぶんチャンネル」を活用した団体紹介もリンクさせ、さらに充実することが必要です。

（２）「ハイブリット」な社会教育活動の支援の推進

① 社会教育施設等におけるハイブリット支援事業の充実

ひかりプラザ、本多公民館、武蔵国分寺資料館に設置した公衆無線 LAN や、各公民館の市民貸出用ルーター、GIGA スクール用のモバイルルーター等を活かす取組が考えられます。オンライン講座はもとより、オンラインミーティングルームの ID 発行、ハイブリット型円卓会議や団体横断的なイベント・行事などの支援事業の充実を求めます。

② 社会関係職員の企画力の向上と「ハイブリット」による積極的参画

これらの企画や参画を社会教育関係職員が積極的に行うことで、行政と市民活動の連携・協働を深め、職員の資質向上を図ることが必要です。また、ハイブリット形式で職員が団体活動に積極的に出向き伴走できる体制整備と資質の育成も求めます。

（３）多様な場で活用可能な学習資源のデジタルコンテンツ化の推進

① 社会教育活動のデジタルコンテンツ化

地域の活動は、地域固有の資源であると同時に、他の地域の学びにも繋がります。社会教育活動を多様な場やオンラインでも活用可能な資源とするため、デジタル博物館や電子図書館の取組とも連動し、デジタルコンテンツ化を進めることを求めます。

② 学校の教育課程や GIGA スクール構想との連携の推進

豊かな社会教育活動が、学校教育の充実にも役立てられるよう、学校教育と社会教育で連携・協働可能な学習テーマや学習資源をプラットフォーム上で可視化し、デジタルコンテンツの相互利用や中継事業等を進めることを求めます。

（４）ハイブリット時代の中の対面活動の支援の充実

① 「対面の価値」に着目した施設利用の促進

社会教育施設は、活動全体が対面で行われることを前提としてきましたが、今後は活動の特性や場面に応じて「対面の価値」を重視し、必要な場を保障したり、学びを支えていくことが重要です。日頃公民館等を利用していない団体でも、活動の一環として「対面」を必要とする機会に機動的に利用できる開かれた仕組みの構築を求めます。

② 「対面」による団体交流を支える取組の推進

団体が直面する課題を乗り越え、新たな気づきや方策を得るためには、本音が語れる「雑談」などの「対面」が生み出す余白が重要な役割を果たします。このため、「対面」での団体交流の機会の保障や拡充を求めます。

（５）新たなネットワーク形成を促進する人材の育成・配置　～「社会教育士」等の活用

「行きかう」「交わる」「重なる」といったつながりを形成し、「広がる」「超える」「届く」学びを実現するためには、伝統的な活動と多様な手法を生かした重層的なネットワークを形成できるコーディネーターが不可欠です。新たに資格化された「社会教育士」も活用するなど、地域人材、ICT 技術者、教育福祉関係者など様々な背景を持った人材と行政職員がチームを形成して社会教育活動を推進する体制整備と人材の育成を求めます。

おわりに

令和３年４月。教育長から諮問をいただいた社会教育委員の会議は、その会議運営自体が模索続きの状況でした。東京都には３度目となる緊急事態宣言が出され、新しい生活様式への「慣れ」と「疲れ」が交錯していた時期でもあります。

社会教育委員の会議は、令和２年春に出された初めての緊急事態宣言下こそ開催を見送ったもの、秋にはオンラインと対面の併用を取り入れるなど、積極的に新しい手法の模索を試みてきました。開催場所である「ひかりプラザ」の Wi-Fi 環境スペースを活用し、委員と事務局が連携を密にして一人でも多くの参加が得られるよう工夫を凝らすとともに、委員各自がオンラインの利点や難しさを体感しながら審議を進める形となりました。委員全員が対面で介す機会を迎えない状況の中で、調査研究のテーマを焦点化し設計を行うには困難も伴いました。しかしながら、各自が日頃の実践や社会教育委員の会議の審議への参画を通して体感した「新たな気づき」が、答申に向けた原動力となり審議の深まりを生んだのは間違いありません。

本答申では、これまで社会教育が生み出してきた「つながり」や「学びの循環」を振り返りつつ、コロナ禍における活動団体の様々な模索や工夫の中から生じている新たな「つながり」や「学びの循環」を４つの視点で整理しました。そして、これらが形成しつつあるつながりの要素を「行きかう」「交わる」「重なる」 といったキーワードで表現し、そこから生じる学びの循環に「広がる」「超える」「届く」といった要素を見出しました。これらを今後の社会教育の展開における重要な要素と捉えつつ、こうした方向性を支えていくために必要な社会教育行政に求める役割を５つ挙げて提言しています。

「With コロナ」が突き付けた生活や学びの在り様の転換は、特定の人々にもたらされたものではなく、全ての市民が直面し臨んだ課題であり、全ての人がこの大きなうねりの当事者であることに特徴があるとも言えます。そしてその模索は、今日定着や発展の段階を迎えながらも未だ続いており、行政の対応も緒に就いたばかりです。こうした市民一人ひとりの躍動を今後の社会教育の新たな展開につなげていくために、本答申が一つの羅針盤として有効に活用されることを切に願います。

おわりに、コロナ禍の厳しい状況の中で調査研究に御協力くださった各団体の皆様に心より御礼を申し上げますとともに、答申を待たず任期を終えられた廣松委員、森山委員、任期中にご逝去された森田委員、そして最後まで力を合わせてご審議くださった根岸副議長をはじめとする各委員の皆様、事務局の皆様に心よりの敬意と感謝を表し、本答申の結びといたします。

（議長　入江優子）

参考資料

諮問文

諮問第１号

令和３年４月22日

国分寺市社会教育委員の会議

議長　入　江　優　子　様

国分寺市教育委員会

教育長　古　屋　真　宏

多様な学びの手法から生まれる新しい社会教育について（諮問）

令和２年度は，新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い，図書館，公民館その他社会教育活動を行うための施設が長期間にわたって臨時休館となりました。施設が再開した後も，人数や活動内容等を制限しています。また，多くの事業が中止又は延期となるなど，人が集まることが難しくなり，これまでの手法を前提とした社会教育の推進が難しいと感じられる世の中になっています。

こうした中，リモートワークやオンライン会議など，人と人との接触を避けるための取組みが推奨されるようになりました。

社会教育の分野においては，実体験を通して学ぶことや，人と人との学び合いやつながりを生み出したり，学んだ成果を社会に生かしていくことが大切であることから，リモートには置き換えることができない学びがあります。しかし，インターネットの環境があればどこからでも参加できるオンライン講座等は，対面による参加が難しい人々を含め，より多くの多様な人々に学習の機会を開くことにつながります。また，オンラインと対面の組み合わせによって新たな学びや人と人とのつながりを生み出すこともあります。

これからは学びの目的や対象によって様々な手法を用いて柔軟に対応する

ことが求められ，新しい社会教育が形成されていくものと考えます。

つきましては，「多様な学びの手法から生まれる新しい社会教育について」ご意見をいただきたく，下記のとおり諮問いたします。

記

【諮問事項】多様な学びの手法から生まれる新しい社会教育について

学びの循環に関するアンケート

学びの循環に関するアンケート

令和３年12月

団体名

Ⅰ　あなたの団体の活動についてお聞きします。

1　活動の主な**対象者**を教えてください。（複数回答可）

※対象者とは、活動や支援の対象となる方、講座や行事等の参加者を言います。

☐　未就学児　☐　小中学生　☐　高校生　☐　学生（専門学校・大学等）
☐　保護者（妊娠期を含む）　☐　現役社会人　☐　高齢者
☐　障害のある方（障害種別：　　）
☐　誰でも参加できる
☐　上記選択肢に分類できない（具体的に：　　）

2　「１」の内容について補足していただけることがあればご記入ください。

例：不登校の子どもを主な対象としている、女性を主な対象としているなど

3　活動の主な**担い手**を教えてください。（複数回答可）

※担い手とは、活動の企画や運営を行う方、指導や支援を行う方、ボランティア等を言います。

☐　有償の市民ボランティア　☐　無償の市民ボランティア
☐　保護者（卒業生の保護者を含む）
☐　教員（退職教員含む）　☐　自治会・町内会関係者
☐　専門職の方（具体的に：　　）
☐　市役所職員　☐　社会教育施設や福祉施設等の職員
☐　活動の対象者（参加経験者）
☐　その他（　　）

4　他の市民団体や団体の連合体（連絡会や協議会など），行政とのつながりはありますか。

☐　ある（下記の表に具体的にご記入をお願いします）　☐　ない

【市民団体（ＮＰＯ法人含む）】	【連合体（連絡会・協議会など）】 ※社会福祉協議会、子ども・子育て円卓会議など	【行政】課名、施設 ※社会教育課、子ども家庭支援センターなど

5　４のつながりがあることで、対象者や担い手の学びにどのようなメリットやデメリットがあると思いますか。（実際につながりのない場合は、個人的な意見で結構です）

メリット

デメリット

その他の意見

Ⅱ　「学びの循環※」につながる取組についてお聞きします。

※国分寺市では、学校や社会教育施設，地域等での学びを通じて，人と人とがつながり，互いに学び合い，学びが継承され，まちに学びがあふれるような「人と人とがつながり，学びが循環するまち」を目指すまちの姿として掲げています。

1　活動の中で、**対象者**にとって以下に挙げるような「学びの循環」につながる取組はありますか。

※対象者とは、活動や支援の対象となる方、講座や行事等の参加者を言います。

☐　ある（下記の項目からお選びください（複数回答可））　☐　ない

☐　対象者同士の交流　☐　多世代や多文化の交流　☐　伝統や文化の継承
☐　学んだことを生かす取組　☐　地域課題の解決に向けた取組
☐　自主グループ（サークルなど）や新しいネットワークをつくる取組
☐　担い手への参画
☐　その他（「学びの循環」につながると思う取組を具体的にお書きください）

２　活動の中で、**担い手**にとって以下に挙げるような「学びの循環」につながる取組はありますか。
※担い手とは、活動の企画や運営を行う方、指導や支援を行う方、ボランティア等を言います。

□　ある（下記の項目からお選びください（複数回答可））　　□　ない

□　担い手同士の交流　　□　多世代や多文化の交流　　□　伝統や文化の継承
□　知識や理解を深めたり、スキルを高める取組　　□　地域課題の解決に向けた取組
□　他の団体等とのネットワークをつくる取組
□　新たな役割や資格の取得、新たな課題への参画
□　その他（「学びの循環」につながると思う取組を具体的にお書きください）

Ⅲ　コロナ禍による活動の変化についてお聞きします。

１　コロナ禍での活動状況について教えてください。
□　緊急事態宣言下では活動を休止・中止していたが，現在は活動を再開している。
□　ずっと活動を休止・中止している。
□　ずっと活動は継続している（コロナ禍の影響は受けていない）
□　その他（　　）

２　コロナ禍での活動方法の工夫について教えてください。
□　従前と同じ方法で活動している
□　人数を減らしたり、場所を変更したりして、すべて対面で活動している
□　活動の一部にオンラインを活用して、対面とオンラインを併用している
□　すべてオンラインで活動している
□　その他
（新たに取り入れた工夫や手法がありましたら具体的にお書きください。）

３　コロナ禍での活動方法の工夫によって、Ⅱで挙げたような「学びの循環」につながる取組は
どのように変化しましたか。
□　実施しやすくなった　□　変わらない　□　実施しにくくなった　□　どちらともいえない

４　３の回答の要因や具体的な変化の内容を教えてください。

５　コロナ禍での活動において、感じている課題や困りごとがありましたら教えてください。

６　コロナ禍での活動方法の工夫によって、従前より良くなったことや新たに生まれたつながり・活動
などがありましたら教えてください。

Ⅳ　その他

１　今後アンケートをお願いする場合，最も回答しやすいのはどの方法ですか。
□　メールに回答用紙のPDFや写真を添付して回答　　□　公民館等公共施設窓口に提出して回答
□　郵送での回答　　□　ファクシミリでの回答　　□　インターネットフォームでの回答

２　あなたの団体の活用概要がわかる資料のご提供をお願いします。
ホームページがあればURLを教えてください。

URL：

御協力ありがとうございました。

第五小学校で行われる「学びの循環」に関する取組調査票

	主な各学年での活動	①新たな学び・体験	②生活での活用	③継続性	④人とのつながり	⑤地域・ボランティア	合計
１年	交通安全教室　小金井警察署						
	訪問交流　　エクセルシオール西国分寺						
	絵葉書教室　恋ヶ窪絵手紙の会						
	保育園交流　市内保育園、地域ボランティア						
２年	東京触れ合いロードプログラム　内藤・日吉防災会						
	新府中街道植林　内藤・日吉防災会　保護者						
	町たんけん　　地域のお店・公園　　図書館						
	昔遊び　けん玉、お手玉　　地域ボランティア						
３年	自転車教室　　小金井警察署						
	ヤゴ救出大作戦　市環境課　地域の専門家						
	自転車教室　　小金井警察						
	国分寺となかよし　ひまわりの種　市内農家						
	広げようふれあいの輪　手話体験　市社会福祉協議会						
	昔をさぐろう　昔の道具見学　市内専門家						
４年	ゴミ分別体験　廃棄物減量推進委員会						
	水道　安全な水を作る工夫　　水道キャラバン						
	ガイドヘルプ体験　　ボランティア体験センター国分寺						
	下水道　水循環の流れ　　下水道サポートセンター						
	フリークライミング　　モンキーマジック						
５年	いじめを防止する　　弁護士会						
	赤米の栽培　　地域の農家						
	新聞づくり　　新聞社						
	保育園交流　　市内保育園						
	イチゴ農家の見学　　市内農家						
６年	あいさつをしよう　　地域ボランティア						
	サマースクール　　地域・保護者ボランティア						
	五小を中心とした立体地図作り　鉄道総合技術研究所						
	蔵書点検　　保護者ボランティア						
	全校駆け込み訓練　　市内店舗　学童保育所　他						

審議内容

回数	日程	内容
令和３年度 第１回	４月 22 日	教育委員会から社会教育委員の会議へ諮問
第２回	５月 20 日	「多様な学びの手法から生まれる新しい社会教育」について
第３回	６月 17 日	答申の構成について
第４回	７月 20 日	答申までのスケジュールについて 教育委員との懇談（多様な学びの手法から生まれる新しい社会教育について）
第５回	８月 19 日	学びの循環に関する調査について（調査の進め方）
臨時会	９月 21 日	調査グループの選定 学びの循環に関するアンケートについて
第６回	11 月２日	コミュニティスクールにおける学びの循環に関する取組調査について 学びの循環に関するヒアリング調査について
第７回	12 月 16 日	アンケート調査の進捗状況について 今後のスケジュールについて 委員の活動状況について
第８回	令和４年 ２月 17 日	各調査グループのヒアリング進捗について 令和４年度の定例会スケジュールについて
令和４年度 第１回	４月 21 日	会議日程について 答申に向けた第２回以降の検討内容について ヒアリングの進捗状況について
第２回	５月 31 日	答申について（構成の検討）
第３回	６月 24 日	答申について（構成の検討）
第４回	７月 15 日	答申について（提言内容の検討）
第５回	８月 26 日	答申について（提言内容の検討）
臨時会	９月 15 日	答申について（全体内容の確認）

委員名簿（50 音順）

	氏名	略歴
1	飯沼　寛量	国分寺青年会議所元理事長
2	入江　優子	東京学芸大学准教授
3	柿崎　洋一	国分寺市立小学校長
4	栗木　美代子	スクールソーシャルワーカー 青少年委員
5	髙島　恵生	国分寺市文化団体連絡協議会
6	張堂　聡文	自治会長
7	徳満　哲夫	元小学校長
8	根岸　まり子	読み聞かせサークル元代表
9	山崎　明子	元公民館長
下記委員は令和４年３月 31 日に任期満了		
	廣松　千晶	民生児童委員 NPO 法人事務局長
	森田　直樹	地域活動団体
	森山　進一郎	東京学芸大学准教授

定数 12 人以内（国分寺市社会教育委員の設置に関する条例）